

第3回白馬村図書館等複合施設検討委員会 議事要旨

日時：令和4年10月8日(土) 14:15~16:15

場所：白馬村子育て支援ルーム ホール

区分	氏名	所属等	出欠
委員長	富山 正明	社会教育委員長・図書館協議会委員長	○
副委員長	平賀 研也	前県立長野図書館長	○
委員	前堀 美緒	しろうま保育園保護者会長	○
	山本 拓真	白馬北小学校 PTA 会長	○
	吉沢 一夫	白馬南小学校長	○
	岩井 良三	白馬村民生児童委員協議会 主任児童委員	○
	藤川 公代	白馬村社会福祉協議会	—
	ワード エミリー	Hakuba International Business Association	—
	中尾 美琴	白馬中学校生徒	—
	田中 悠李	白馬中学校生徒	—
	宮澤 一生	白馬高等学校の生徒	—
	石崎 椋太	白馬高等学校の生徒	—
	北澤 麻希	公募委員	○
	福島 のり子	公募委員	○
	川坂 保宏	公募委員	○
	山口 聡一郎	公募委員	○
事務局	松澤 宏和	生涯学習スポーツ課長	○
	渡邊 宏太	生涯学習スポーツ課 生涯学習係長	○
	松沢 由美子	図書館司書	○
	下川 浩毅	子育て支援課長	○
	松澤 拓哉	子育て支援課 子育て支援係長	○

報道機関：2社（大系タイムス、ユーテレ白馬）

傍 聴：イベントに参加した住民・事業者6名も意見交換に参加

1. 開会

松澤生涯学習スポーツ課長が開会を宣言した。

2. 挨拶

(富山委員長)

今日は複合施設を考える上での実証実験的な位置付けで「はくばあそびまなびフェス」が開催され、非常に多くの方が来場し、様々なプログラムを楽しまれていた。白馬村という地域や複合施設の可能性を感じるようなイベントになったと思う。

「公園をつくってほしい」という長年の保護者の要望があるが、こうしてみんなで様々なものを持ち寄ることで手づくり感のある素敵な空間を創り出せることがわかった。

今日はイベント参加者にも検討委員会にご参加いただいている。率直な意見をお聞かせいただきたい。

3. 「はくばあそびまなびフェス」を終えて図書館等複合施設に対して思うこと

(平賀副委員長)

「あそびまなびフェス」を見て、白馬村は素晴らしいと感じた。様々な地域で公共施設のプロジェクトなどに関わっているが、1番の悩みは施設をつくるために活動を生み出そうとしても、その主体がないということである。今回、短い期間で声を掛けただけで、「地域の人たちと一緒に何かやりたい」という人がこんなにたくさん集まって、若い世代も多く、お客さんの立場ではなく、地域で主体的に活動しているということに驚いた。

この姿を新しい複合施設で形にすれば良い。ただ単に箱をつくれれば良いわけではない。こういった場を、毎日とはいかなくても、定期的で開催して日常にしていこうためにはどうしたらいいのか。この資本・資源をいかに新しい施設に入れ込んでいくかということをお今日はみんなで話してみたい。

これまでの2回の検討委員会では、新しい複合施設はどういうものか、「ありきたりの本がある図書館」や、「ありきたりの遊び場がある子育て支援施設」ではなく、「自分たちがどういう暮らしの体験をしたいのか」ということを皆さんに話していただき、居場所や過ごし方、そこで起こってほしいことをお話いただいた。機能以外にも、用地や官民連携なども、どういった可能性があるか話し合い、村の意思決定に役立てていただくというのが検討委員会の役割である。

今日はイベントを通じてそれぞれが感じた、どういった活動をしたらどうなるか、あるいは自分はどうか関わりたいかといったことを共有したい。また、用地に関して、今日この場所を改めて素晴らしい環境だと感じた。これまでの議論の中でも、「豊かな自然に囲まれた場所が良い」という意見が出ていたが、白馬の中でも素晴らしく恵まれた立地だと思う。その辺りも皆さんそれぞれどう思われたのか、今回はワークショップというよりは、それぞれの想いを聴いていくような形で進めていきたい。

(北澤委員)

本日のイベントでデザインワークショップを実施した。ものづくりが好きな子はすごく集中して楽しんでた。室内で集中して取り組む子と、外で遊びたい子が分かれてそれぞれに楽しんでいる様子が印象的であった。中も外もどちらも楽しめるし、友達を待っている必要もないし、場所として良い環境だと思った。

短期間で声を掛けたらすぐに多くの人が集まったという話があったが、白馬出身の人や移住してきた方など様々な方がいてバランスも良いように感じた。

(福島委員)

今日のイベントには、自分の子どもを連れてきて参加者として関わらせてもらった。白馬で生まれ育ったが、自分の子どもたちにも大好きな白馬で育ててほしいと思ってここで暮らしている。自分も子どもたちも自然が大好きで、元々中部保育園であったこの環境も本当に素晴らしく、保育園でもお散歩に来るらくだ山があったり、森があって川が流れていて神社もある。この都会にはない「四季を感じられる白馬らしい環境」が、複合施設に適していると思う。

こうしてみんなが集まるイベントは、コロナ禍の前にもあまり無かったと思う。子どもたちが主役になって遊べる場が無かった中で、短期間でこういったイベントが開催できたということは、みんなが求めていたものだと改めて感じた。たくさんの保護者から「こういうのいいよね」とか「この場所がいいよね」という声を多く聞いた。これから新しい施設ができたとしても、隔週や月1など地域で活動している人たちと一緒に創っていければ、人がたくさん集まって子どもも遊べてみんな楽しく過ごせるのではないかと感じた。

(平賀副委員長)

今日のようなイベントではなく、日常の中で子どもが学校帰りに複合施設に寄って、教えてくれる人がいなくてもそこに素材や道具があって、自由に遊んだり物を作ったりすることは、今日の一部を切り取って実現できると思う。図書館が単に居場所だということではなく、そこでの「過ごし方」について、今日のイベントにたくさんのヒントがあったように感じる。

(イベント参加者)

白馬に住んで16年が経ち、上の子は小学校高学年になった。白馬は自然が豊かで良いところであるが、子どもが集える場がない。「公園がほしい」ということを10年以上前から村にお願いしてきたが、未だに実現していない。自然が豊かである反面、小さい子が安心して遊べる環境や、雨が降った時に行く場所がない。子育て支援ルームは大きくなると利用できない。今日のイベントもそうであったように、公園に行くことで地域の知らない子たちと友

達になれる。村内にたくさんの子どもがいるのに、誰かの家に行くということしかできず、一部の子としか関わる機会がないというのは残念である。公園があれば新しい友達ができたり、久しぶりの友達に会える場所になる。学校帰りに寄って、異年齢の交流ができることも公園や複合施設の良さだと思う。今の子どもたちが育つ前に施設ができてほしいというのが切な願いである。

(平賀副委員長)

雨の日や冬の間は家に閉じこもりがちな人が増えるであろうし、違う学校に進学した中高生なども同じ地域に住んでいるのに再会する機会があまりないと言われている。子どもからお年寄りまで誰でも来ることができて、コミュニケーションが発生するような場があると良い。

(前堀委員)

結婚をきっかけに白馬に移住し、子どもを育てながらガラス工芸の体験工房で観光客を相手にサービスを提供している。観光資源も大切だし、日々の暮らしや住みやすさも大切だと感じている。

観光の施設は新しくできていく中で、地域の人たちが集える場所や施設が乏しい。子どもが小さいときは子育て支援ルームを利用して同世代の方と出会えたが、子どもが大きくなった時に行く場所がなく、子どもも「公園がほしい」と言っている。子どもが自分の足で行ける場所がなく、遊びに行くとなると親の送迎が必要となり、行く場所や会える人が限られてしまう。子どもが自ら人間関係を築いていく機会があまりないと感じている。

観光も大切であるが、まずは住民が暮らしやすく、交流もできるような地域であってほしい。今日のようなイベントに人がたくさん集まるということは、「楽しいことをしたい」という地域の需要はある。イベントがなくても、日々の暮らしの中でそういった場所があれば、多くの方が利用すると思う。そこに中高生が勉強をするスペースがあったり、ビジネスで来られている方や外国から訪れている方が使うようなコワーキングスペースなどがあつたりすれば、立ち寄る人も増えると思われ、今日のイベントを通じて複合施設の理想の形を見せていただいたように感じる。

(平賀副委員長)

湯布院や小布施など観光地や地域外の人を受け入れるような地域では、訪れる人のための街づくりなのか、住まう人のための街づくりなのか、常にジレンマが生じるが、住む人の暮らしやすさを求めていくと、自ずと訪れる人との関係性ができて来てくれる。白馬はそういう地域性があると感じる。

今日のイベントでは、キッチンカーでも名前や顔を知っている関係性が多く見られて、そこで自分は「お客様何にしますか」と聞かれて、よそ者の寂しさを感じた。自分の街の図書

館なのに「いらっしゃいませ」と言われることには違和感がある。

普段はスノーピークなどで観光客向けのビジネスをしているかもしれないが、今日は少し違う雰囲気であったのではないか。複合施設にシェアキッチンがあったりキッチンカーを出店できる場所があったりしたら何か提供してみようと思うか？

(イベントに参加した事業者)

地域外に出店することもあるが、普段から地元のイベントにも多く出店していて、地域の子どもたちが小さい頃から営業しているため、地域の顔見知りも多い。複合施設ができればキッチンカーで出店したいとも思うが、普通に利用者・参加者として遊びに行きたい。地域に知っている子どもたちも多いし、会えると楽しい。

(山本委員)

イベントが終わる頃ようやく会場に来ることができたが、たくさんのプログラムが提供されていて、可能性を感じるイベントであった。担当の渡邊さんから「イベントで何をやったらいいか」と相談されて、当日は手伝えなかったが、あれこれ好き勝手に提案させてもらった。今日のイベントはどれくらいの団体がブースを出していて、そのうち白馬で活動している団体はどれくらいの割合であったのか。

(事務局)

大小含めてプログラムの数は40くらいで、一部を除いてほぼ地元で活動している団体や住民に協力してもらっている。

(山本委員)

先程から言われているとおり、約1ヵ月でこれだけのプログラムがほぼ地元の人材でできるというのは素晴らしいことだし、それを受け入れられる場所であるということを改めて感じた。会場に来て知り合いの子どもたちにも会えたり、良い意味で小さくまとまってつながれるというのは非常に良いことだと思うし、それが白馬村の魅力にもなっていくと思う。一回で終わるのではなく、継続して実施していくことで、「ここに来れば何かができる、誰かに会える、誰かと出会ってつながれる」という施設にしていきたいし、それが実現できるということを今日のイベントで感じた。

(平賀副委員長)

今世紀に入ってビジネスのイノベーションで注目されているのは「小さく弱いつながり」である。「小さい」と言っても閉じているわけではなく、それほど濃くも強くもなく関係性が見えるような半分開いた状態である。他の地域ではそういったものをつくろうとしているが、白馬には既にそれがあって、それが「白馬らしさ」なのかもしれないと感じた。

(北澤委員)

イベント開始直後に来てくれた親子で、父親が安曇野市から白馬・小谷に通勤されていて「この地域に通って5年経つが、こういったイベントは初めてなのか」と聞かれた。白馬に住んでいない方にとっても興味深いイベントだったということが印象的で、お子さんもとでも楽しまれていた。

(平賀副委員長)

地域の中心になる人物が様々な人をつないでいく事例が多いが、白馬ではそれぞれの活動やつながりが元々あって、今回きっかけをつくったらみんなが集まってきたという印象を受けた。

(川坂委員)

午前中は用事があり午後から参加したが、会場に来て「こんなにたくさん子どもたちが白馬にいる」ということに驚くとともに、とても素敵な場だと思った。新しい図書館の計画がなかなか進まず、担当者にもいろいろ言ったりしたが、精力的に取り組んでいただき、良い方向に進んでいると感じた。既存の図書館に物足りなさを感じているが、若い人たちの声を聞いて良い施設をつくってほしい。

子どもたちにとっては遊びが大切で、今日は楽しそうな様子がたくさん見られた。村内のいろいろな場所に公園があれば良いと思うが、白馬の最大の魅力である山の景色をのんびり楽しめるこういった場所に、子どもたちが遊べる場と本が読める空間があれば良い。

(平賀副委員長)

同様に「白馬にこんなに親子がいるんだ」と驚いた。いつもどこかにいるはずであるが、単に「いる」だけでなく、こうして何かをしている様子が「見える」ことの大切さを改めて感じた。それが敢えて施設をつくることの意味なのかもしれない。

図書館の本に関しては、今日のイベントでも白馬村図書館がブースを出して宣伝していたが、8月から県と市町村の協働で「デジとしよ信州」という電子図書館サービスが始まり、家にいてもそれなりの本を読めるようになったため、ぜひ利用してほしい。

(岩井委員)

先程「子どもの足で行ける場所」という意見があったが、神城地区など遠くに住んでいる子どもたちは自分の足では来られないため、シャトルバスのようなものを考えた方が良いのかもしれない。他の地域で子どもの足に関する事例などはあるか。

(平賀副委員長)

難しい問題で、地方では特別な移動手段を用意する余裕はない。スクールバスが走っているのであれば、複合施設を経由地として、親が認めた場合は乗降を認めるなど、工夫のしようはある。図書館のサービスを考えると、先程の電子図書館だけでなく、地域の公民館・集会所に本棚を設けて有機的につなげ、家の近くで自ら行けるところでも体験や情報に触れる機会を創ることも必要だと感じる。

(吉沢委員)

今日のイベントは神城の子どもたちもたくさん来ていた。何らかの手立てがあれば、神城地域の子供たちも楽しい場所に来るといことが感じられた。

官民連携の勉強会で参加者から学校の統廃合について意見が出ていたが、子どもの数は減少傾向にあり、村でもアンケートを取ったりしている。隣の大町市でも統合の議論がされているが、地域住民の想いもあり難しさもある。複合施設の整備について、学校の統合や校舎の改修の計画を待ってしまうと、どんどん先送りになってしまうため、議論を止めないように進めていくことも大切だと考える。新たな小学校が別の場所にできても、複合施設はそれはそれとして村の中で大事にしていけば良いと思う。

(平賀副委員長)

伊那市では過疎化が深刻な中山間地も多く、小規模特認校として残しながら、ICTの活用により中心部の規模の大きい学校と一緒に授業を受けたりしている。図書館に限らず、村の学びや情報の基盤をどうつくるかということは、複合施設にとって重要な要素となる。それをうまく考えられれば、統合がどうなったとしても地域の情報インフラの拠点として複合施設が役に立つことができるのではないかと。それらも含めた基本計画を策定できれば良い。

(図書館司書)

イベントで提供されるプログラムを見て関係する本を図書館から持ち出してブースに備えたが、寒かったこともあり外でじっくり本を読むには厳しい状況であった。イベントには多くの方が訪れて楽しそうに過ごしていた。今の図書館は少し寂しいが、新しい施設になることで、多くの方が図書館を利用してくれたら嬉しい。

(平賀副委員長)

図書館のブースも良かった。限られた蔵書数の中から上手く選書していると思った。男の子が立ったまま絵本を読んでいる様子が印象的、そこに図書館の人がいてくれて、そこに本があつて良かったと感じたし、とても素敵に見えた。

デジとしょ信州の宣伝もしてくれていたが、白馬村でももっと多くの人に登録して利用してもらいたい。国立国会図書館では今年の8月から著作権の切れた本や絶版の本などをデジタルで300万冊読めるようになっている。様々な本や情報にアクセスできる状況にな

ってきていて、その中でリアルな図書館がどうあるべきかを考えなければならない。

(図書館司書)

白馬村図書館はコロナ禍でも休館せずに対応してきた。自宅で夜遅くに走れメロスの内容が気になり、デジとしょ信州で読んでスッキリして眠りにつくことができた。そういった使い方もあると気づいた。

(平賀副委員長)

じっくり紙のページをめくっていく読書もあれば、気になるところだけを読む読書もある。様々な読み方があることなども踏まえて、新しい図書館がどういう役割を担うべきか、今後も議論していく必要がある。

(事務局)

プログラムを提供するブースの前に関係する書籍を配置しても良いのではないかという意見もあったが、準備や天候のこともありそこまではしなかった。次回以降は挑戦してみたい。

(平賀副委員長)

伊那市で夏の間月に一度、最終日曜日に開催している朝マルシェがあり、みんなで朝ごはんを食べようということで有機農家さんが出店して、その野菜を使って飲食店が料理を提供している。毎月テーマを決めているが、それぞれのお店で関係する本を置くようにしている。図書館の本にこだわる必要はなく、今日の各ブースでもそういったことはできるだろうし、新しい図書館の中にも司書が選んだ本だけではなくて、村民が自分で選んだ本棚をみんなのために開くということがあっても良い。最近そういった動きも増えてきている。

(イベントに参加した事業者)

東京から移住してきて会社を経営しながら、子どもたちを集める場づくりをしている。「場」にもいくつかの観点があり、Building (建物)、Field (遊び場)、Community (イベント的な場) など、「無いからやらない」のではなく、自分たちから創っていった方が良くと考え、サマースクールなども開催している。今日は図書館等複合施設の未来を想像できるイベントになってとても良かったと思う。

今日のイベントでは、落ちている枝木を切って絵を描くクラフトのワークショップと、地域と暮らしのゼロカーボン勉強会としてコンポストづくりのワークショップを開催して、白馬インターナショナルスクールの生徒なども来てくれた。都市部では大学生がコミュニティを盛り上げる役割を担うことが多いが、白馬には大学がないので、長野と松本から大学生に来てもらった。Building (建物)、Field (遊び場)、Community (イベント的な場) とい

う点で、この場所はかなり最適な場所だと思う。駅や学校からも近く、みんなが訪れやすく、次につながることを期待する。

(平賀副委員長)

ビジネスと地元の人との学びをつなげるということもできる。例えば小さな宿泊棟があり、地元の子どもたちも外から来た人も大学生も一緒に泊まりながら何かに取り組めるような場所があることも立派なビジネスになる。そういった可能性も探りたい。外から来た学生と地元の子どもたちが関わる機会も増やしていきたい。公共と民間で別々に取り組むのではなく、公共の中に民間が入って上手く連携したら良い。

(イベントに参加した大学生)

子どもの頃は話すのが苦手であったが、図書館であればおすすめの本について話したり、公園の遊具で遊びながら話ができたり、場によって話しやすさが変わると思う。オンラインだと話す機会がないかもしれないが、図書館があって本があることで生じる会話もある。対面だからこそ過ごしやすくなるといった面も、複合施設においては大切だと感じる。

(平賀副委員長)

今日ここで起きていたことは対面のコミュニケーションで、今まではそれが当たり前であったが、今この時代にあえて対面で何をするかということは図書館も含めて問われている。施設をつくるということもそういうことで、みんなが様々な活動をしている中でリアルな場所をつくるというのはどういうことなのか、真剣に考えなくてはならない。

(イベントに参加した大学生)

小さい頃に大学生と山でキャンプをするような経験もしたが、学外でのつながりが生まれ、継続的に交流が続いた。学びという観点でも、子どもたちだけでなく、自分たち大学生も学べるものがたくさんあり、こういう機会があると刺激的で良いと思う。図書館も子どもから大人まで地域外の大学生なども含めて、つながりを生み出す場になってほしい。

(平賀副委員長)

静岡県焼津市に「みんなの図書館」という私設図書館があり、お金を出して自分の棚を作ってみんなに見てもらおうという仕組みで、全国 50 箇所くらいに広がっている。本や動物など人と人をつなぐ媒介があれば、会話も生まれるし子どもも大人も学び合うきっかけになる。今日はそういったものがたくさん見られて、人の大切さを改めて感じる事ができた。

(イベントに参加した事業者)

今日のイベントで初めて子育て支援ルームと木流公園に来てみて、「こんなに良い施設が

あったのか」と新発見で驚いた。

白馬は移住されてくる方も多く、祖父母が近くにおらず、両親共働きで子育てされている方が多い。横のつながりで友達の家遊びに行くこともあると思うが、「図書館の職員がずっといる」とか「あそこに行けばあのおばちゃんがいる」というような、地域の中に親でも先生でもない馴染みの顔があったり大人の目があったりして、一言声を掛けたりする大人が多くいたら子どもは幸せなのではないかと思う。いつも行くところ、子育て支援ルームの先生だったり、図書館の司書さんだったり、そういう人がいるというのは安心な環境だと思う。いつでも自分が行きたいときに行ける場所、組織や団体など属していなくても行けるところ、居ていい場所があるというのはとても素敵なことだと感じる。

地域でイベントの企画などもしているが、ブックバスを読んだことがある。本が大好きな子は、ずっとブックバスにいる。白馬の図書館は小さく、本屋も大町市に行かないとないため、親の時間に制限されてしまうが、本に触れることを欲している子どももたくさんいるように思う。

(平賀副委員長)

山口県宇部市では、こども食堂をきっかけに街全体を巻き込む動きになっていて、「親でも教師でもない大人が地域の中で身近に 2 人いる状態をつくる」ということを目指している。本は冊数だけではなく、楽しさや行きたいと思わせるような仕掛けも必要である。小布施町では新たに 28 歳の図書館長が就任して、最初に始めたのが軽トラックの上に乗せる移動図書館をみんなで考えて作ろうという企画であった。子どもたちも一緒に設計図を書いて、完成した移動図書館を街の中のイベントなどに出かけている。本の量だけではなく、「触れる場所」を増やしていくような工夫も面白い。白馬村の新しい図書館も劇的に本が増えることはないかもしれないが、図書館の職員に限らず様々な企みをみんなで創れたら良いと思う。

地域から書店がなくなり、大規模店は大町市に行かないとないという状況であるが、複合施設の中で本を売っても良いのではないか。他の地域では併設するカフェで図書館グッズや本を売ることが検討しているところもある。地域に本の取引ができる場所があればそこに関わってもらえることもできるし、そういったところがなければ個人でも流通に関わることになっているので、何らかの形でそういったものができる方が良い。本を借りるだけでなく買えることも大切なことである。

(富山委員長)

今日のイベントではヤギを通じて子どもたちと仲良くなることができた。普段はブルーベリー園で草を食べさせていて、そこに遊びに来てくれている子どもたちも何人か今日のイベントに来ていた。保護者も何人か知っている方がいて、昔の生活の話をしたり、ヤギにこんなに身近に触れられるのは初めてだという話をしていた。「これだけ人がたくさん来て

いるのに、なぜこういったイベントを以前から開催しなかったのか」ということを疑問に感じた人もいて、こういったイベントをやっていくことで、「こういう場所が欲しい」という想いや図書館・複合施設に対する興味をみんなが持ってくれるのではないかと思う。こういった機会を通じて多くの方に興味を持ってもらい、「こういった場が常であればどんなに楽しいだろう」ということに気づいてもらえれば、検討もさらに進むと思う。図書館を前面に出してしまうと、「私には関係ない」と思われてしまいがちであるが、子どもの遊び場や高齢者の暇つぶしなど、みんなの居場所になるためにどんなものがあれば良いかということをもみんなに考えてほしいと思う。今、そういった場所が白馬村にないということにみんなが気づいたのではないだろうか。観光施設などでお金を払えば行けるところはあるが、お金がかからず気軽にいつでも行けるという場所が白馬村にはほとんどない。以前から検討の場で「子連れで他の子どもたちと一緒に遊ぶのに、お金を払って行ける場所はあるが、子どもが騒ぐと気兼ねするためなかなか連れて行けない。仕方ないので友達の家に来る」という話が出されている。複合施設ができてれば気兼ねなく集まれる。なんとなくそこに行ったら知り合いがいる、そんな場所が欲しい。屋外の公園だけでなく、屋内の施設としてもそういったものが欲しいという話も以前から聞いていて、その辺りが白馬村に欠けていたところだと思う。

今回の話の中で、少し時間はかかってしまっているが、「やっと『住民のための施設』というものに腰を上げてくれた」と思って委員を引き受けた。途中で若干観光に傾きかけたこともあったが、やはり今住んでいる人たちがいかに豊かに楽しく安心して住めるかということをお金を大切にするための施設として位置づけてほしい。今回のようなイベントも、それが日常になるような形に置き換えられるような施設にするにはどうすればいいかということを考えていきたい。今回は子どもを軸に話をするのが多かったが、平日の昼間は時間に余裕のある大人や観光系の自営業の方などが利用し、土日になれば家族連れなどが利用するなど、時間帯や曜日によって人の動き方も違うため、それらを考えながらみんなが上手く利用できたり楽しめたりする場所にしていく必要があるということを感じた。

今日のイベントでは、ワークショップやプログラムを提供する人がこんなにたくさん集まった。小さい村の中でいろいろな活動をしたり、様々な技術を持っている人たちが多くいるということは、複合施設ができたときにも様々なワークショップのようなものが常時開催できるし、それらを通じて住民同志が接する機会が多くなればなるほど、やりがいや生きがいがある面もある。多くの方に施設を利用してもらい、そこに人が集まれば、図書館もイベント等に関連する資料を提供するなど上手くタイアップしていくことで利用が促進される。そういった可能性を秘めていることが今回のイベントでよくわかった。ぜひこれからも機会を見て数多く開催しながら、住民の気持ちを盛り上げてほしい。

検討委員会では一部の委員で話をしているだけになってしまうが、みんなが関わられるような話になってくれば、行政側も進めやすくなると思うので、そういった雰囲気づくりの第一歩として今日はすごく良かったと思い感謝している。

(平賀副委員長)

委員長から、「真ん中に住民＝住まう人のための場をつくる」ということを置いたらどうか、という話があった。一番最初に議論されたのはその点であり、様々な経過があったが、「住んでいる人たちを真ん中に置いて議論しましょう」というのは、基本計画を見直す上での共通認識として確認しておきたい。そして、住んでいる人々にとっての居心地の良さというものが、訪れる人々にとっても魅力的であり、地域の外からも人が来てくれるようになればいい、ということも大切である。

もう一点は、委員からも多くの意見があったが、この環境の中で起こっていた今日のイベントはとても素晴らしかった。この環境、この場所はとても良いと思うが、皆さんはいかがか。「いや、ここではない」、「他に可能性を探るべきだ」という意見はあるか。

(富山委員長)

木流公園は、保育園や近所の人が散歩したり、観察会が開催されるくらいで、それ以外の利用があまりなかった。せっかくこんなに素敵な公園を整備したのに、上手く活用されていないと感じる。

(平賀副委員長)

県道白馬岳線に立ち並ぶアウトドアショップにも劣らない、むしろ優れた環境だと感じる。2018年に県立図書館長を勤めていたときに白馬で「ウィキペディアタウン」というイベントを開催して、まち歩きをして地域を巡りながら白馬村に関するウィキペディアの記事を書いた。その時に初めて木流公園を訪れて、「ええ、ここすごい！」とみんなで声を上げた。個人的にはとても素敵な場所だと思う。村としては候補地がこの場所になれば、西側の一段上の農地も含めて一体的に整備することも考えているようであるが、それに対して皆さんのご意見はどうか。

(各委員)

良いと思う。

(平賀副委員長)

皆さんの感触としても異論はないということで確認しておきたい。

(事務局)

候補地については、当初の検討委員会の報告書で、村有地を活用できて、学校や役場からも近く、山も見えるし、自然環境もあるため、子育て支援ルームの場所が良いのではないかということが意見としてまとめられていた。そのときは図書館だけということで検討して

いて、その後複合施設ということになり、駐車場もある程度確保する必要があったり、公園など屋外の広場も整備するとなると、子育て支援ルームの敷地だけだと少し狭いため、西側の農地も含める形で検討している。この場所が良い！という近隣にも住宅が複数あり、音の面で静かな場所が賑やかになることや、路上駐車や私有地への侵入が増えたり、景観や眺望が失われるのではないかとといった点で、施設整備に対して不安を感じているという方もいる。また、前面道路の整備なども課題である。住民や議会でもこの場所を望む声が多くあり、この場所で進めることが多くの人々の希望であると感じている中で、「みんなが行きやすい場所」を考えると、周囲に住宅がある場所が多く、施設をどこにつくるにしてもそういった近隣住民への配慮は必要であると考え、できるだけコミュニケーションを取りながら検討を進めていきたい。基本計画の見直しの中で案として示し、パブリックコメントなども経た上で最終的に決定する予定である。

(川坂委員)

今日ここにいない人の意見もあるし、神城地区の人たちの利用しやすさなども課題であると思うので、その辺りも検討して、しっかり説明して意見を聴いた上で決定してほしい。

(平賀副委員長)

「誰もが利用しやすい施設」という観点においても、一施設の話ではないし、山とスキーの総合資料館との連携など他の施設とのつながりも考えていかなければならない。ただここに施設をつくるというのではなく、今日のような状態が起きることを前提にした上で「この環境はとても素晴らしい」ということを意識しなければならない。

また、今後の対話の場について、今日のようなイベントの真ん中に対話の場があって、子どもだけでなく高齢者なども多様な人々が参加しながら話ができる機会を創っていくことを考えても良いと考える。今は検討委員会という選ばれた人たちの中で議論が進んでいるが、もっと開かれた形で、施設づくりというよりはまちづくりという広い視点で、自分の暮らしの課題について話しながら、それが施設の計画に反映されていくような場を設けてほしい。新潟県小千谷市や愛知県蒲郡市では、首長が市民参画で対話を通じて新しい複合施設・融合施設をつくっていくことを明確に打ち出している。市の担当部局の下に有識者のデザイン会議を置いて、建築や図書館、地域づくりなどの知見を有している人を入れている。一般的には「リビングラボ」と言われるようなもので、計画段階から設計段階、運営段階、それぞれにおいてワークショップを定期的に行って議論を続けていく。施設のことだけを議論するのではなく、自分たちの暮らしや活動のことを話す場として、いつでも誰でも気軽に参加できるオープンな形で、そこで話されたことはしっかり広く報告される。現在、官民連携調査が行われ、事業性が評価され、計画段階に入っていく中で、検討委員会ではなく、村民誰もがいつでも参加できて、「物申す」のではなく「自分には何ができるか」、「みんながどうなったら良いか」という考えで議論できるような場を考えてほしい。委員長をはじめ

委員もできるだけ参加していただき、必要に応じて他の図書館や複合施設の事例や関係者にもお話いただいたりするような場があると良いと思うので、ぜひ検討いただきたい。行政の動きを待っているのではなく、自分たちでテーマを決めて開催するような形でも良いし、行政と一緒に開催しても良い。そういうことが起こり続けると良いし、白馬ならそれができると感じた。

(富山委員長)

「複合施設のワークショップをやります」ではなかなか人が集まらないため、イベントの中に取り入れる方が良いかもしれない。様々な年代層の人たちが集まるイベントを兼ねながら、施設に限らずまちづくりや暮らしの疑問や課題を話したり、ざっくばらんな話をピックアップして、みんなが望むものを実現するためにはどうすればいいか議論することで、新しい課題も出てくる。

(平賀副委員長)

伊那市では5月から10月にかけて毎月1回マルシェを開催している。それをきっかけに人々が知り合っていく中で、毎月最終火曜日に「生業を起こしたい人の話を聞く会」や「何か商品化して販売してみよう」といったことが起きている。食べることで作ることで何でも良いが、白馬でもそういった場をつくってしまい、その中に対話の場をプログラムとして埋め込めると良い。「話さなければならない」となるとプレッシャーを感じる人も多い。

(北澤委員)

デザインのワークショップをして、未就学児の親子と小学生が全部で50名くらい参加してくれたが、来てくれた子どもたちや保護者に複合施設に関する意見を聞いておけば良かったと思った。今日は説明などで余裕がなかったが、プログラムを提供する人たちが参加してくれた一人ひとりにヒアリングして、その内容をみんなで共有することもできると感じた。

(平賀副委員長)

今日良かったのは、ものを売る人・買う人という関係性だけではなくて、ただそこにいるだけでもその場を創っている人になれたことである。マルシェでも、ものづくりイベントでも、みんなでご飯を食べる会でもいいし、そういう場で施設の建設や運営に向けて話している場が見えると良いと思う。

(富山委員長)

新しい図書館についても、知り合いと立ち話をするときにはいろいろな声が聴けることがあって、構えてしまうと「ちゃんとした話をしないとけない」と感じてしまい、思っている

ことを言えない人もいる。立ち話では、ここで話していることと同じような話が出てくる。そういった話が自然に出てくるのが大切だと思うので、機運を高めることと、様々な意見を聴く場を上手くつなげられると良い形のものができると思う。

(イベントに参加した事業者)

今回こういったコミュニティとしての場をつくっていただき、みんなが「すごく良かった」と口にしていろんな可能性を感じた。これまでも「図書館をどうするか」という議論が繰り返されてきた状況があり、次につなげるためにどうしたらいいのかを決めていく段階に来ていると思う。ただ単純に建物を建てるのが目的ではなく、みんなが「こうしたい、こうだったらいいよね」という、まさにこの場をどう実現するかということ、こういったイベントを実施しながらみんなのイメージを集約して具体化していくプロセスに移っていけるようにできるだけサポートしたい。また、議員さんなどいろいろとおっしゃると思うが、こういった場にあまりいらっしやらないというのは残念だと感じる。

(平賀副委員長)

小千谷市のリビングラボでは、議員さんに来てくれとお願いしたわけでもないのに、自主的に2-3人は参加している。小学生からそういった役職を持っている人まで多様な人たちがフラットに話せる・居られる機会を創ってほしい。

(富山委員長)

今回のことをきっかけに、そういう施設があったら何をするか、どういうことをすれば人が集まるかというような具体的な案をみんなで出し合い、建物の具体的な部分や全体的な施設のイメージにもつなげていくと良いと思う。図書館だけで考えるのではなく、図書館を核にどういうことができるのか、白馬ならこんなことができそうだといったものを具体的に出してもらい、それを集めて積み上げていき、その中から取捨選択しながら、上手く利用できるものにしていく作業を早く始めていかなければならない。イメージ的な話はこれまでずっとやってきて、みんなで共有できていると思うが、具体的な話になるとまだそこまで突っ込んでないため、こういった話を積み上げていけると面白い話になっていくと思う。今後の検討委員会の中でも取り上げていきたい。

(平賀副委員長)

子どもたちを集めて複合施設でワークショップをやりたいとおっしゃっていた北澤委員は、今日それをここで実現された。そういうことが1個ずつ実現していくようなそういう場所があると良い。それは「食べる」、「ものづくり」、「はたらく」、「商い」、「学ぶ」など様々なテーマがあって、建築が云々ではなく、そこに役場の職員や建築家が参加することで、そこから拾って形にしていくような形であると良い。生涯学習の一環として場を新しく作る

ということを、役場に頼らず住民主体で実施するという選択肢もあるが、それが建築のプロセスなどに位置づけられていくと一番良い。現在、官民連携の事業性評価が進められていて、直営かPFIかという話になったとしても、自分たちがどうしたいのかということをお大切に持っておかなければならない。

(イベントに参加した事業者)

候補地がJR白馬駅としたことが反対されて見直すというところまでは知っているが、その後の検討についてあまり知らなかった。検討内容を多くの村民に知ってもらい、「こんな施設をつくりたい」、「完成したらあんなことをしたい」ということをみんなで楽しみながら話せるように情報を発信してもらい、噂話になるくらいにしてほしい。今日のイベントも複合施設を見据えて「みんなでここで実験してみよう」ということをもっと前面に出して、イメージを膨らませながら意見を言い合ったりアンケートに回答してもらったりできたのではないかと。どうすればみんなに知ってもらい、興味を持ってもらえるか。

(平賀副委員長)

こういったイベントを大規模でなくても良いので定期的に様々なテーマで開催していくことで、徐々に自分ごととして参加する人が増えていくと思われる。

(事務局)

広報については難しさを感じていて、Webサイト・SNS、広報紙、ケーブルテレビ、新聞折込など、媒体が多様化して、行政から発信する情報量も多く、あらゆる手段を尽くしても半分も伝わらないくらいのイメージである。「図書館等複合施設」というと、興味を持って読んでくれる人もいるが、逆に「自分には関係ない」と流されてしまう人も結構いると感じている。今回のイベントでは、プログラムを提供いただく方には複合施設のことを伝えてお声がけしていますが、一般の方には複合施設のことを前面に出さず、とりあえず楽しそうなイベントを開催するという形で参加してもらうことを目的とした。今後、複合施設に向き合った議論もしていく必要がある。候補地を白馬駅とした基本計画を出したときは多くの方が反対して説明会にも参加してくれたが、検討経過の一部だけを切り取って伝えてもあまり反応がない。広報は当然注力すべきで、このイベントや検討委員会の報告も、勉強会で話されたことも、しっかり伝えていかなければならない。一方で、どこまで真面目に伝えるか、どこまで難しい言葉を簡単に置き換えるかなど、分量や伝え方も含めて悩ましい部分もある。多くの人に伝えるためにも、こういった「楽しさ」や「ワクワク感」も抱き合わせて発信していく必要があると考えている。ケーブルテレビでも、伝え方を工夫することで番組自体が話題になって「ちょっとあれ見た？」と噂になるような伝え方ができたら一番良いと思うが、なかなかそこまではやりきれていない。

(富山委員長)

今回のイベントでも、輪が広がり、検討状況を知ってもらえるきっかけになったと思うし、こういった機会を繰り返し設けていく必要がある。プログラムを提供いただいた皆さんには、複合施設の整備を踏まえて今回のイベントがどうであったのか考えてもらいたい。図書館にカフェをつくる・つくらないという話もあるが、今回のようにキッチンカーで一時的に出店するという形もあるし、日替わり・月替わりで常時出店してもらうなど、様々な考え方が出てくる。まず人を集めることから始めて、そこに様々な要素を盛り込んでいくというのが広がりやすい。難しい面もあるが、住民が盛り上がるのが大切なので、機運を高めていきたい。

(平賀副委員長)

昨日・今日と開催された官民連携の勉強会で事業者の説明を聞くと、「モデルプランを作って事業性を評価して、直営の従来方式か PFI 方式かどちらか答申する」という話であったが、配布されたアンケートを見てもわかるように、モデルプランが「従来の図書館」や「従来の子育て支援施設」をベースに考えられている。今日ここで起きていたことはそうではなく、例えば「いつでもみんなで寄り合って食べ物をつくってその場でみんなで食べられるようなキッチン」や「焚き火をする場」などは、従来の図書館や従来の子育て支援施設には無いものである。「学校帰りの子どもたちと焚き火を囲んで何かしたい」というような具体的な話がないまま検討が進んでしまうと、それは実現し得ない。勉強会で出されていたような他の地域の事例から単に機能を選ぶだけでは、「白馬らしさ」もないし、地域の人が求めているものでもない。どういった場をつくりたいかということは、施設に限らず、キッチンカーや焚き火など、そういったものから拾っていくだけで良い。そういった議論をしていく場を、行政と住民で一緒につくって行ってほしい。今後のスケジュールはどう考えているか。

(事務局)

検討委員会は頻繁に開催できないため、誰でも参加できるような場を設けて、重要な局面で検討委員会を開催する形で進めたい。

(平賀副委員長)

多くの方に来ていただける開かれた場でテーマを設けて議論できたら良い。

(富山委員長)

そういった場でも出された話を集めて検討委員会でまとめていきたい。

(山本委員)

今回のイベントを冬に実施したらどうなるのかといったことを試してみても良いのでは

ないか。冬になると遊具などが使えなくなってしまうが、冬は冬でできることもあると思う。冬の遊び方を知っている人たちに協力してもらいながら、通年で施設が使われるためにどうすればよいか考えることも大切ではないか。

(事務局)

過去にジャンプ競技場で若者交流イベントとして「大人の雪上運動会」を開催したことがあり、とても面白かった。天候やトイレなど課題もあるが、できることもあると思う。

(平賀副委員長)

ウィンタースポーツなどに限らず、「雪と暮らす」というテーマでこの場所でできることを考えても面白い。四半期に一度くらい開かれた場を設けて、楽しみながら対話する場を設けて、専門家が施設につながる要素を拾っていく作業ができるの良い。

(イベントに参加した事業者)

しっかり想定を立てて、仮説検証をしっかり行ってほしい。例えば、冬にイベントを開催しても子どもはたくさん集まると思うが、天候や寒さなど課題も多く出ると思う。施設整備の際にはその課題を解決できるようにすることが大切で、検証を目的に冬のイベントも実施した方が良い。冬の課題を解決できれば通年で子どもが集まるだろうし、大人も含めて学びが深められる場になっていくと思う。

(平賀副委員長)

今後、施設整備に向けて、例えば3ヵ月に一度くらいそういう場があって、施設ができてからも定期的に開催されていくといいなあと思う。そろそろ閉めなければならないが、言い残したことやこれだけは言っておきたいことがあれば伺いたい。

(イベントに参加した事業者)

今日はワークショップを開催して、子どもたちがたくさん参加してくれて嬉しかった。今の子どもたちはゲームばかりしているイメージがあったが、そうでもないと感じた。小さい頃にはこういったイベントが無く、あったら楽しかっただろうなと思った。

(平賀副委員長)

普段はものづくりなどの機会がないだけで、今日のイベントを見て放課後や休日にこうした場があれば、高校生や大学生に教えてもらいながら好きなように創作したり活動すると感じた。

(富山委員長)

今日は子どもたちの楽しそうな表情がたくさん見られたのが印象的で、場や機会を創るだけで自分たちで遊び出すということがよくわかった。

(イベントに参加した事業者)

山仕事創造舎が森の中に遊具を設置するという手伝ったが、子どもたちが楽しんでいる空間に未来を感じた。今までそういった機会はなかったが、今後恒常的にそういう場所が設置できて、みんなが子どもたちを通して白馬村の未来を感じられればとても素晴らしいことだと思った。

(平賀副委員長)

この案件は、現時点でいつまでに何をしなければならないということが決まっていない。時間に追われて苦労することが多いが、白馬村ではみんなでしっかり話し合ってもらいたい。今日のイベントを体験した子どもたちは、このイメージを持って中高生になったら子どもたちに提供する側になっていく。

(事務局)

今日のイベントでは、多くの方にご協力いただき、たくさんの方に楽しんでいただくことができた。検討委員会でも様々な意見を出していただき、今後の方向性や可能性が見えてきたと感じる。

今後も対話を続けながら検討していきたいので、多くの方にご参加いただき忌憚ないご意見をお聞かせいただきたい。